

平成 27 年 4 月 1 日

各都道府県協会理事長 殿
各ブロック協会理事長 殿
各連盟理事長 殿
関係各位 殿

(公財)日本ハンドボール協会
競技本部長 江成 元伸

競技運営に関する確認(平成 27 年 4 月 1 日実施)

平成 27 年度、各大会、競技を実施するに際し、下記の事項について、関係者に周知徹底を図るようよろしくお願いします。

記

1 第 38 回全国高等学校ハンドボール選抜大会の顛末と今後の対策

(1) 大会の顛末と処理

第 38 回全国高等学校ハンドボール選抜大会準々決勝において、下記のような事案が発生しました。今後は下記に示す処理の方法により、遅滞なく各試合、大会が運営されるようお願いします。

レフェリーが「着地、ラインクロス、ゴールキーパースローで再開」の判定をしたが、スコアラー、TD は得点と勘違いし記録した。前半終了後のハーフタイム中の異議申立てに対して、確認の処理をせず申立を却下した。TD は試合終了後再度異議申立があり TD は不適切な得点をあげた事実を認定したものの、試合終了を根拠に再試合の処理をしなかった。その後日本協会は情報収集をした結果、準決勝当該試合は得点修正をした結果同点となることから延長戦から再試合とする、当該試合後の準決勝については再試合を行うことを決定した。決勝に勝ち上がる方法が不適切であることから、決勝戦を中止とした。

主管団体の不適切な対応、主催の日本協会の判断に遅れが生じ、選手、チーム役員、保護者等関係の皆様、観客の皆様にご迷惑をおかけしたことを衷心よりお詫び申し上げます。

なお、再試合の再開については、当該チームの今後の対応が全チームとも難しいとの意見もあり、諸事検討の結果、当該チームの同意もあり、決勝戦を行わなかったにもかかわらず 2 校の優勝とした。また、3 位も 2 校に当該の 1 校を加え 3 校とした。

(2) 今後の対策

競技本部長通知により、平成 27 年度各大会において適切に競技運営がなされるよう通知により指示をする。

1) 従来、競技運営中不適切な処置が起きた場合は、そこまでの競技結果(得点、罰則等)は成立させ、明らかになった時点から適切な処置を行った上で競技を再開するという処置を再確認する。例えば、退場になった選手が何らかの理由から退場せずに競技に出場し得点をあげていたことが判明した場合、退場しなければならなかった事実が明らかになった時点で退場とし、それまでの得点等は記録として成立させるということである。なお、この場合の責任はレフェリー、TDにあることから、選手にそれ以上の罰則を適用しない。

今回の事例でいえば、不適切な得点記録を修正する確認が行われた時点は試合終了時である。修正した結果は明らかに勝敗に関連する同点ということであったことから、次の試合を開始せずに、速やかに延長戦を行うべきであった。次の試合が始まったとしても、不適切な得点管理が判明しその結果勝敗がつかない場合は、当日中、もしくは翌日にその状況から再開する必要がある。

2) レフェリーは得点となったこと、得点でないことを明らかなジェスチャー等で表現し、記録席及び観客にわかるよう表現する。TD、記録席員は得点があったときはレフェリーと相互に確認し合う。レフェリーは得点を管理しておかなければならない。

今回の事例でいえば、着地、ラインクロスの判定は得点と間違いやすいことから、レフェリーは大きなジェスチャーをすることが必要であり、誤って得点が加算されないよう得点掲示に配慮する必要がある。

3) 得点に関する競技規則を確認する。9の2により、レフェリーが次に行うスローオフの笛を吹いたならば、与えられて得点を取り消すことができない。

得点後のスローオフ実施までに、前後半の終了合図があった場合は、(スローオフを行わなくても)得点を与えたことを明示しなければならない。

【注】レフェリーが得点を与えたならば、直ちに得点をスコアボードに掲示する。

今回の事例は、ラインクロスの違反でゴールスローからの再開であることから、誤りやすい状況下であったことから、スコアボードの掲示に配慮する必要がある。

4) 得点を与えられたときの記録用紙の書き方の再確認を行う。得点の合図があったときは得点をあげた選手の背番号を記入し、累積の得点を記入する。その後、スローオフの笛の合図によって得点の時間を記入することで得点が確定する。ゴールに入ったときの時間を記入することがミスを起こす第一歩である。TDはスコアラーに注意深く指導する必要がある。

2 テクニカルデレゲート(TD)の任務、平成27年度版を発行した。前項に関して下記の事項の追加を行った。

(1) 前項の内容を前文に掲載し、注意喚起及びTDの任務を確認し、適切な競技運営がなされることが求められることを強調した。

(2) 事実判定を除いた異議申立てについては、真摯に対応し、適切に判断する。必要があれば競技委員長、大会委員長と協議し、原則としてその場、もしくは当日中に判断、その後の対応を決定する。

(3) 平成20年度から裁定委員会は選手、チーム役員、レフェリー、大会関係者による重大な過失を伴う行為、処置も対象としてきた。

- (4) 得点、罰則の記録ミスが試合中に判明した場合は、その時点から正しい状況で再開する。試合後終了後に記録ミスが判明した場合は、勝敗に関する場合は相応しい状況から再試合をしなければならない。

平成26年度の選抜大会のように、試合終了後であっても得点記録が不適切であり、修正した結果同点であった場合は、延長戦を行わなければならない。

試合中に退場しなければならない選手が何らかの理由によって退場せずに試合に出場し続けたことが判明した場合、その時点から退場を適用する。出場したことに対する責任はレフェリー、TDにあり、選手にそれ以上の罰則の適用はしない。事実が判明する間にその選手が得点をあげた場合は、その間のすべての記録を認める。

- 3 TDの服装は、TDとして統一したスポーツウェアを着用することが望ましい。
- 4 競技中に外傷等が発生した場合、出血を認める場合はコート内に留まることは許されない。レフェリーが交代地域に行くことを指示する。止血の確認がなされた後、競技参加が可能となる。骨折、脱臼といった整形外科的外傷、脳震盪、心臓震盪、その他競技に出場することで選手の健康が明らかに阻害されると判断できる場合は、医師、専門家の判断を参考にして、チームの判断で出場の可否を決定する。誰が見ても明らかに競技することが適切でないと判断される場合は、競技に参加することができない。
- 5 熱中症、感染症対策は、大会本部だけではなく、各チーム、関係者の協力を得て防疫体制を整えるとともに、感染防止の知識の普及及び意識の啓発を図る。健康上異常があるとき、または異常があると疑われるときには出場可否に関する判断は大会本部が行うものとする。
- 6 レフェリー・TDの間で通信機器の使用を積極的に推進する。通信機器は公的な電波を利用することから、短時間の交信で、的確に行う。交信の内容として、事実判定に関する指摘は避けなければならない。TDは、レフェリーが見ることのできなかった失格相当の違反を助言することができる。
上記の事案でも通信機器を利用することで、レフェリーとTDの間で情報交換、確認が行えることから、ミスを未然に防ぐことができる。
- 7 本協会競技委員長、本協会審判長は競技運営を円滑に推進するため、また、レフェリー育成のため、記録席または別の場所から通信機器を用い、レフェリーに各種のアドバイスをすることができる。
- 8 ユニホームは自分のチームを含めて、はっきりとコートプレーヤー、ゴールキーパーと区別できる色を用いなければならない。競技本部として、白一色を用意することを推奨する。ユニホームに高さ20cm以上の背番号、高さ10cm以上の胸番号をつけないなければならない。背中に名前を入れる場合は、高さ10cm以内とする。ユニホーム、短パンツ、ソックスに表記されるメーカーロゴの大きさは、IHFが規定している20

c m² を超えてはならない。

- 9 試合中、交代地域にスペースがあればウォーミングアップをすることができる。ウォーミングアップを中断するようであれば、直ちに座るよう指示をする。ウォーミングアップ中にコート内に向かって指示を出すようなとき、試合の判定に反応して大きな声もしくはジェスチャーをしたときは、直ちに座るよう指示をする。状況によってはスポーツマンシップに反する行為として、レフェリーを呼び、罰則を適用させる。
- 10 チームタイムアウト請求カード（グリーンカード）は、チーム役員が記録席の机の上に置かなければならない。チーム役員が不在の場合は、チームタイムアウトを請求できない。グリーンカードはチームタイムアウトを請求するときだけ、手に持つことができる。グリーンカードをもってコーチングゾーンを越えたときは、躊躇することは許されない。チームタイムアウトとして1分間の競技中断が認められる。ブザー等で競技が中断し、レフェリーの合図の後、50秒が計測される。50秒の合図があった後、1分で競技を再開するようにしなければならない。
- 11 交代地域では、チーム役員、選手のあらゆる通信機器の使用を禁止する。試合の記録媒体として、i - P a dのような情報端末も通信機能を持つ機種が多いことから、使用を禁止する。通信機器ではないが、メガホンの使用を禁止する。
- 12 ネット、キャッチネットは的確に設営する。キャッチネットはゴールポスト後方のゴールネットにできればゴム紐で編み込むようにセットすれば、キャッチネット上部がたるむことはない。ボールがキャッチネットに絡みつ়く原因の多くはキャッチネットがコート床に接着していることによるものが上げられる。キャッチネット下部をコート床に接着させないようなセッティングが望ましい。
- 13 ゴール等の競技用具の事故防止等の安全管理に、さらなる配慮をする。

以上